

学校をつくろう!通信

がっこう・N.P.O.



第136号

学校の役割

その 115

コロナウイルスの感染予防のため、4、5月は通常の授業を取りやめ、珊瑚舎 WEB スコールと称して教室を離れ、自宅などで LINE や ZOOM などのアプリを使ったオンライン授業を実施しました。僕が担当するじんぶん講座の教材にしたのは3月26日付の朝日新聞朝刊に掲載された記事でした。記事は前もってコピーしてオンラインで配布しておきました。

地方の大学の教員がコロナウイルスに感染していたことを巡り、地域から多数のハラスメント(いやがらせ)があったことを大学関係者が記者会見で明らかにしたという内容です。

どんなハラスメントだったのか。大学には付属高校があり、春休みの部活で登校中の生徒が、「コロナ、コロナ」などと指をさされたため、制服での登校を中止したこと。教職員の子供の預かりを保育園から拒否されたり、会社勤めの配偶者が出勤停止されたこと。高校に対しては数十件、電話でのハラスメントは100件以上あったとのこと。ちなみに、14名の濃厚接触の大学職員は全員感染していなかったそうです。記者会見に臨んだ大学の学長は「教養教育をさらに充実させなければという思いを強くした」と語ったとのこと。

授業は次の3つの点について考えることから始まります。一つ目は、「コロナ、コロナ」と指をさすハラスメント、二つ目は保育園が教職員の子供の預かりを拒否したり、教職員の配偶者が勤務先で出勤停止にされたハラスメント、三つめは大学の学長さんがいう教養教育とはどんなことか、この3点です。40分の授業を2回ただけですから、入口に立っ

て中をのぞいているような状態です。また、二つのハラスメントを考えるために、短いコラムを一編、コピーしてネットから配布しました。人種差別する側と実際に人種差別を受けた体験について書かれています。筆者は人種差別を乗り越えるために、いかにもロックバンドのボーカルらしく、ハグの大切さを訴えていました。このハグはライブで生まれる客との一体感を言っているものだと思います。それは身体性と強く結びついたものです。体じゅうが触覚器官となり会場全体が共鳴しあっているような状態です。

場が共鳴体に変容するのはロックコンサートだけに限りません。珊瑚舎スコールが授業に対して、その場に参加しなければ手に入れることのできない知的、芸術的体験の場と捉えることも授業を、そして学校を共鳴体として捉えようとしている表れです。異質な他者との異質の境界を越えたところに生まれる共鳴体としての学校です。

オンライン授業をしなくても、オンライン授業が機能化された電波に支配されていることに気づく人は多いと思います。オンライン授業が終わった後感じる物足りなさや忘れ物をしているような感覚は人間の身体そのものから生まれるリズムを再生できないからです。コロナ下の必要最低限の形としてオンライン授業を考えなければならないと思います。

一つとても重要なことがあります。共鳴体であればなんでもいいわけではありません。例えばポピュリストの演説、時として恐ろしいほどの一体感です。その行き先の悪夢を私たちは知っています。何がそこに立ちふさがることのできるのか。教養です。(ほ)

がじゅまる しんかめちゃー



(生徒・学生のコーナーです)

2020年春、世界中に感染拡大をもたらしているコロナウィルスの影響を受け、あちらこちらで不自由を強いられる時間が続きました。準備期間中は珊瑚舎として今何ができるのか、最大限かつ最小限に可能なことをやろうと、3密を避け、検温などの健康チェック、セキエチケットをお願いした上で2020年度4月11日、「入学を祝う会」を行いました。

感染拡大を避け登校を見合わせる生徒もいましたが、参加できる生徒達と「入学を祝う会」を準備し、当日はオンラインでの参加も可能な会を作りました。

新入生は昼間3名、夜間2名を迎え昼の生徒は22名、夜間中学校は7名でスタートしました。

珊瑚舎行事の合言葉は「自(G)準備、自(G)作、自(G)演、自(G)片付けの4G。しかし今回は小さな会だったため、終了後は自片付けなしの解散となりました。

会が始まると用意していたオンライン画面に次々と生徒達の顔が集まりました。今までとは全く新しい形をとりながらの会でした。代表のホッシー(星野)は、「入学を祝う会」はお正月みたいなもの、やらないといけない。新入生も揃って一緒にスタートを切る事が大事なんだ、そういう場に一緒にいるんだという事が大切だと言っていました。夜間中学の生徒達には体調面の事を考え今回の会への参加を遠慮してもらいました。

沖縄県内、東京から入学予定の新入生へ向けて、在校生から「新入生を迎えることば」がオンラインで紹介されました。

「迎える言葉」

中等部 石嶺 織愛

まず初めに、皆さまご入学おめでとうございます。今現在、様々な問題で騒がれておりますが、無事、皆様を珊瑚舎に迎える事ができて、嬉しく思います。

珊瑚舎は、各々の個性やセンスを尊重し、伸び伸びと過ごし、学ぶことができる自由な学校です。

夏頃にはハーリーや「まにまに祭(前期学習発表会)」が、冬頃には、とうんじーあしびや「うりづん庭(後期学習発表会)」が、それ以外にも様々な行事が行われますので、楽しみにしててください。

最後に今、この言葉を書いている僕から、皆様に向けての言葉を送ります。普段、こんな真面目な事を言う人間ではないため上手く文章として成り立っているかどうかわかりませんが、少しでもこの言葉で皆様の緊張がほぐれていれば幸いです。

また、珊瑚舎での生活は、良く言っても悪く言っても「未知」だと思っています。

周りの人間がなかなか個性的な人達ばかりなのですが、悪い奴はいないと思うので、自分の事含め、どうか怖がらないでください。

長くなりましたが、改めてご入学おめでとうございます。これから始まる生活を、皆様楽しみに待っていてください。

学校をつくろう!



新学期を迎えましたが、新型肺炎コロナウィルス感染拡大や市中感染を避けるため、やむなく自宅待機をせざるを得ない生徒も出てきました。そうした生徒達の登校への安全安心を考慮し、数

日間の休校日を設けました。その後はオンライン授業で生徒達とつながりをもちました。この状況について今、私達がどんな事を考えたらよいのか、代表の星野が生徒達に向けメッセージを発信しました。紹介いたします。



休校中のみなさんへ

学校 NPO 珊瑚舎スコーレ 校長
星野人史

☆珊瑚舎スコーレからの呼びかけ

「学校をつくろう！」

という言葉の中身を考えるために

※ちょっと難しい言葉や言い回しがあります。ワードのフリガナ変換を機械的に使います。分からないことは調べて下さい。それでも分からない時は遠慮なく質問して下さい。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

新型コロナウイルスの感染が収まらず、日常生活で当たり前だったことに対して様々な自粛(じしゅく)要請(ようせい)が政府をはじめ各自治体からも盛んに発信されています。そんな中、珊瑚舎スコーレは4月11日、「第20回入学を祝う会」を開催しました。参加にあたっての感染予防対策については7、8日のミーティングで、保護者、講師の方々にはSNSを通じて連絡しました。参加しない、或いは参加できない新入生や在校生にはスカイプで映像と声の交換(こうかん)ができるようにしました。

開校から20年目の出発にあたって、僕が入学を祝う会で皆さんに話した「新入生を迎えることば」を聞いてもらえなかった生徒もいるし、また、時間の都合でかなり端折(はしよ)って話したところもあるので、そのあらましを書き、「学校をつくろう！」を考えるための参考にしてほしいと思います。

☆野生の犬、リカオンとウイルス

地球上には様々な種類の命が存在しています。僕たちは動物でヒトという種類の命を生きています。その命が今、新型コロナウイルスによる感染症の恐怖に直面しています。感染症という言葉で、ふと思ひ起こすことがあります。テレビ番組で観たアフリカのサバンナに暮らすリカオンと呼ばれるイヌ科の野生動物のことです。人の暮らしの影響を受けて絶滅が心配されています。体つきは耳の大きな瘦(や)せ犬のようで、同じイヌ科で生息地域が重なるハイエナと比べると半分ほどの体格に見えます。しかし、狩りの成功率は群を抜いていて80パーセントです。狩りの成功率が最も高い肉食哺乳類とされています。ちなみにライオンの狩りの成功率は20～30パーセントです。その成功率の高さは群れによる抜群の頭脳的チームワークによるもので、群れの結束力の強さがリカオンの頭脳的な狩りを実現させているようです。

リカオンには仲間同士の結束を互いが確認するための習性があります。それは舌でお互いの口を舐(な)め合うことです。挨拶(あいさつ)がわりにキスをしばらく交(か)わしているように見えます。ところが、この習性がリカオンを絶滅の危機に陥(おとし)れているのです。感染症の蔓延(まんえん)です。人によるサバンナの開発が進み、リカオンと人との距離が近くなり、人によって運び込まれたウイルスに感染したことが原因と言われています。仲間がウイルスに感染して死んでいっても、リカオンは舌で互いの口を舐めあうことをやめません。リカオンのウイルスに対する無知、無防備を人である僕たちはどうすることもできません。感染が広がる中、一心にお互いの口を舌で舐め合う姿を見ていると切なくなってきました。しかし、リカオンの絶滅を食い止めたいと思う人たちがいます。現在リカオンがどのような状況に置かれているのか詳細は知りません。

リカオンはウイルスと戦えません。ウイルスを知らないからです。人はウイルスと戦えます。ウ

イルスを知っているからです。当たり前のことのようですが、この「知っている」ということを考えたいと思います。それは「人であること」を考えることでもあります。

☆遠くの飢餓(ききん)と近くの新型コロナウイルス—反応と思索(しさく)そして想像力について

新型コロナウイルスに対する様々な情報が飛び交っています。その様々な情報をもとに人は感染から逃れる方法を考えます。人が初めて出会った未知のウイルスですが、研究者のお陰でだんだんその姿が分かってきました。分かって来ても目の前にウイルスの脅威(きょうい)がぶら下がっている状態に変わりはありません。存在を感知できないものに生存を脅(おびや)かされるのです。何とも言えぬ怯(おび)えと暮らす時間が続きます。

怯えどころか死の恐怖に曝(さら)されながら生きる人々がいます。毎日約25,000人が死に、その内約14,000人が5歳以下の子どもたちであるという現実、餓死者(がししゃ)の数です。僕はいつも、できることをして、しなければならないことをしようと思っています。目の前のこともずっと遠くのこと、気づいたことに対して、できることをして、しなければならないことをする、そうしたいと思っています。

毎日毎日、様々な現実が姿を現します。例えば餓死者の数が毎日25,000人という現実、気の毒、可哀そうと覚えることは反応です。その反応、気持ちですが、それを力に餓死という現実を巡(めぐ)り、事実を調べ、考えを巡らし、現実に対する行為を見つけ出すことが思索です。思索は以(もつ)て人の人たる所以(ゆえん)です。知るということは知識を思索によって体系化することです。思索は想像力を育(はぐく)みます。想像力は現実をさらに暴(あば)き出し、本質の在処(あ)りか)に人を導く力です。反応以外は人に固有の営みです。

「できること」とは例えば新型コロナウイルス感染予防のための情報を集め、それを具体的に行うことです。また、地球上の飢餓(きが)に対して具体的な行動をすることです。「しなければならないこと」とは例えば、珊瑚舎スコールを様々な仲間と作り続けることです。入学を祝う会をどんな形にしる延期も中止もせずに行うのは学校という場にとって1年の始まりと終わり、つまりお正月=入学を祝う会と、大みそか=畑の卒業を祝う会は何があろうが、その時できることをするのです。お正月と大みそかが決まっていなくて、カリキュラムと時間割による中身づくりができなくなります。

気づいたことに対して、できることをして、しなければならないことをする、その根本に置く言葉は「個の尊重」です。人が長〜い、長〜い、その進化の歴史の中でようやく手に入れた生まれただてで、まだ湯気が上がっているような、赤んぼのように初々しい言葉です。その中身を作るのは私たち一人ひとりです。大切に大切にみんなで育てたいと思います。

☆鳥の囀り(さえずり)のような不思議な鳴き声

リカオンは生きることの切なさを思い起こさせてくれるような気がします。かつて人も同じような命の切なさの中を生きてきたのではないか。もしかすると今もそうかもしれません。リカオンの姿に遠〜い遠〜い昔につながる自分の命のあり様を感じるのでしょうか。だから、切なくなるのでしょうか。獰猛(どうもう)で残忍(ざんにん)、体の模様(もよう)も汚(きたな)らしい、実際は襲(おそ)っていないのに家畜を襲うなど、人の無知、無理解から生まれる嫌悪(けんお)や憎悪(ぞうお)などの感情が引き起こす反応の犠牲(ぎせい)となったのです。リカオン絶滅の危機は、感情と反応に対する思索と想像力の欠如(けつじょ)が作用しています。それがリカオンを殺すことに躊躇(ちゅうちょ)もためらいもない状況を作りました。もちろん、反応することが悪いことだと言っているわけではありません。知識と思索と想像力

によって身つく反応もあります。それは学ぶことを通して手に入れることができるものです。学びましょう！珊瑚舎スコーレはそういう学びをみんなと作りたと思います。学びましょう！

あの犬とは思えないような、どこか鳥の囀り(さえずり)のように聞こえるリカオンの鳴き声が、物悲しく聞こえてきます。

☆☆☆☆☆☆

難しい書き方になりました。ごめん、こんな言い方になっちゃうのです。もっと勉強しないとね、ほっしーから Nattoon! をもらえない。最後まで言葉の道を辿って(たどって)くれてありがとう。休校中に開設している「珊瑚舎 WEB スコーレ」の午後の時間を使って、この言葉の道を歩きやすいように道普請(みちぶしん)してくれる人が何人も現れてくれると、とてもうれしいよ！ ☺

- ・30代後半よりアメリカインディアンの生き方に救いを感じて過酷なフィールドワークなどをする。
- ・栄養士、小学校教員、精神保健福祉士の免許を取るべく3回大学(通信制)に入学するも、国家資格は体に合わず取得を断念。勉強は好き。

仕事は色々やりました。編集、DTP、派遣手配、医療系研究所事務など、主にデスクワークですね。なんでもやってしまうスーパーデスクワーカーでした。きっと。でも一度、友人にそそのかされて古民家カフェをやっていた時があって、エレキ(山がんまり古民家移築メンバー)が来てくれていました。こないだ10年ぶりに再会して懐かしかったです！

いつも流れに逆らわず動いてきました。沖縄に来たのも、その流れの中にあっただと思います。ただ、寮スタッフの仕事は、今までの全てが役に立っているように感じます。擦り切れるまでとことん使い切ってもらおうと思ってます。ここだけの話ですけど、寮は自治制にして、カフェかゲストハウスを隣接して寮生のバイトを創出できるといいなあ、と夢見ています。

珊瑚舎は、自分が育った環境に少し似ていて、馴染みやすいです。学校で会ったら「あ、こいつ、寮スタッフのトコちゃんね」とスルーしてください。

どうぞよろしく願いいたします！

では最後に、卒業生のふみすけが書いてくれたタコ紹介をどうぞ！

<ふみから>

- ・からす(々共鳴)と思いきやオオハシ
- ・地面でねれる
- ・あったかいごはんをつくってくれる
- ・なんかびっくりするくらい助けてくれる
- ・行動に移すのが早い
- ・おどろくともものすごい奇声をあげる

ふくぎのふぁー



(講師・スタッフのコーナーです)

井上徳穂(イノウエトクホ) 丙午生まれ。2019年9月より寮スタッフ。

- ・東京小金井市生まれ、台湾高雄市育ち(6才~)。
- ・台湾の日本人学校では1学年7人程度。全校生徒による運動に学校行事にとかなりなスパルタ教育だった。9年もいたので最後の方は学校の主(ぬし)となる。
- ・高校入学に合わせて帰国、高校卒業後、日本社会に馴染めずゲロゲロな泥沼生活を送る。
- ・29で出産し、やっと社会に馴染んだフリができるようになる。



沖縄だより

「サバ日記」パート1

安田ふみ (2015年度卒業)

「サバニを再生する」と確かに聞いた。口が動いた。「いっしょにやるわ！」

そもそも自分は船大工でもなければ、大工でもない。無職のヒマ人である。やったこともないものを偉そうに「やるわ！」といったのは、タケチャンがいたからだ。タケチャンは、すごい。「無人島に行く時に何か一つ、持っていくなら？」と聞かれたら絶対に「タケチャン」という。多分、タケチャンは死んでも死なない。

サバニ再生は、ホッシー、エントモ、タケチャンがサバニを発見する所から始まった。「これならいける」らしく、タケチャンに知念体育館裏に呼び出された。本当は、どつかれるかと思った。ちょっとこわかったので何名か引き連れていくと、そこには海を背景にタバコをふかすタケチャンとゴミの山があった。

ゴミの山は、サバニだった。一番初めの作業は、ゴミ掃除だった。半日かけてゴミ山からサバニを引き出した。誰かの服やヘルメット、ベコベコの空き缶、島ぞうりの鼻緒、アタッシュケース（金が入ってるかもと悪戦苦闘してこじ開けたら、とても汚いパソコンが入っていた）。ゴミをかき出す度に、乾いたネズミのフンが粉塵となり舞い上がった。快晴のはずなのに、視界が悪い。

やっと見えだしたサバニの底には、いくつかの穴があいていた。

自分にとって、サバニは恋そのものである。5年以上前、沖縄の「ハーリー」という行事に参加したことがきっかけだった。「ハーリー」とは、旧暦の5月4日にサバニを漕ぎ競い合うことで、航海の安全や豊漁を祈願するものらしい。ホッシーには、「ハーリーの鐘が鳴ると梅雨があける」と教えてもらった。鐘の音は海に広がり、漕ぎ手の一人となった自分にも響いた。ハーリーの時期、サバニが海に戻る

頃には、自分も沖縄の海に戻った。

ここまでくるとストーリーである。そして、ハーリーに向いていた気持ちは、いつしかサバニそのものに移っていった。

こんなに美しいものに、今まで気が付かなかっただなんて、と。

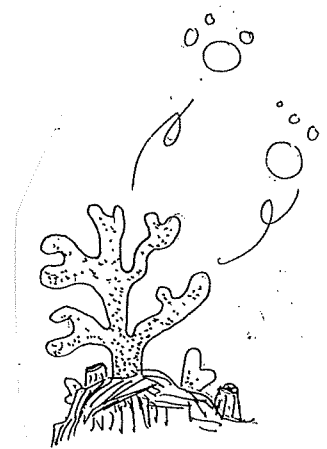
日をまたぎ、サバニは体育館裏から山がんまりへとトラックで移動した。主なメンツはタケチャン、スギウラさん、トコちゃん。テントを張り、晴れの日も雨の日も作業は進んでいく。

山がんまりの上空にはサシバが「ピックイー」と鳴きながら舞い、タケチャンも「ピックイー」と鳴き、トコちゃんはピョンピョンはねて飛ばうとしている。

*サバニとは

語源としては、「サバンニ」。サバ(鮫)のンニ(胸)という言葉からきている。琉球舟。美しい(美舟)。木を焼き、炭にしながらくり抜いて作る「クリ舟」から、杉の木を竹クギなどでつなぎ合わせる「ハギ舟」、現在よく見かける船へと琉球の歴史や生活と共に変化している。現在漁業ではエンジン付きのものが主流となっているが、沖縄各地にまだハギ舟作りやその作り手が残っている。この文章では、杉材と竹を主として作られた手漕ぎの舟を指す。馬天ハーリーでは鐘打ち、舵取り合わせ12名が乗る。

ポリプのゆくえ



珊瑚舎から旅立ったポリプの幼生達(卒業生、講師、そのほか巣立って行った人たち)が、定着した先々で今どうしているのか。リレー形式で綴ってもらいます。

「ポリプのゆくえ」

青野 笑奈 (2007年度専門部修了生)

私は幼い頃から絵を描くのが好きだった。

小学生の頃、休み時間になれば友人と絵を描いて遊び、中学生になると授業のノートは落描きだらけ。高校生、どこにでも絵が沢山描けるようにと線のないらくがき帳をノートとして選び、授業が始まれば筆箱の横に絵の具。これが机の上の私のセットだった。

高校を卒業して珊瑚舎に入学。ここまでくると授業のノートはスケッチブックになり、やっぱり落描きだらけ。

一つの授業を絵本の様に色付きでまとめるのが好きだった。

数年前、今までのノートも含め描いてきた絵を見返して気づくことがあった。

私が描く絵は、紙いっぱい全部に色が塗られている。風景のような区切りのない絵もあれば、ただただ人が立っている絵。だけどその周りには色が塗られている。白い部分を全部なくすように色々な色を使って。その絵は誰に見せるわけでもないけど、なぜだろう、なんだか無理に完成させている気がした。

どうしてこんなに塗りつぶすのだろう。

ああ、そっかそれは私だな。どうにかして隙間を埋めたい、隠したい、満たされたい。そんな当時の自分のいっぱいいっぱいな気持ちが伝わってきた。いっぱいいっぱいと言ってもそれは辛かった、苦しただけではなく、葛藤している気持ちや満たされてる気持ちや穏やかな気持ちも合わせて。

そしてその後の絵、多分、珊瑚舎を卒業したあたりからの絵には余白がある。少しずつだけど、白い部分も多くなり、見るのに窮屈じゃなくなった。

ああ、全部塗られてなくても大丈夫。何も描かれていない部分に不安を持つことがなくなった。

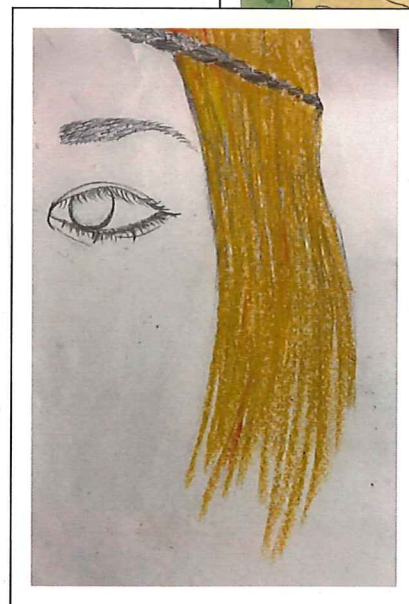
むしろその余白にワクワク感を持てる自分がいる。珊瑚舎で過ごした日々はきっと私に余白の様な余裕を持つ事、ほら空いてるよといつでもここにどうぞと声をかけてくれてそっと安心して身を置ける場所がある事。これからどんな人や事に出会ってどんな

自分と出会うのだろう、これからの楽しみを与えてくれた。完璧に出来なくてもいい、完璧に完成させなくてもいい、無理やり終わらせなくてもいい、納得いくまで時間をかけていい。自分のペースで。そんな気がした。

絵は消したくなったら消せるし捨てる事だってできるけど、描いたという事は消せない。生活でも同じで自分のしてきた事は消えない。だけどそこにどんどん上から塗り足したっていいし、余白があれば新たなことを描いて足して、無限に楽しめる。

暮らしの中でいっぱいいっぱいになってしまった時、少し余白に身を置いてみることにしている。不思議と気が抜ける。

そして珊瑚舎の事も思い出したりしてみんなに会いたくなる。また会いにいきますね。



卒業制作 自画像より

*2019年度「卒業を祝う会」後、3日間の校外活動「山がんまり」があります。最終日に行われる「畑の卒業式」で卒業生は自画像を読みます。そうして在校生達とともに珊瑚舎スコーレと畑からの卒業を認め合います。3月卒業した生徒の文章を紹介します。

「自画像」

上野 響生

自分に問いかける。何度も何度も問いかける。少しずつ見えてくる。自分の嫌いなところ、黒い部分。言い訳して、逃げて、同じ失敗を繰り返す。ダラダラと過ごし、表面的にはあたかも頑張ってるようなフリして、そんな自分が許せない。って自分で思ってるくせに体は動かない。手にも足にも頭の中にも十トンくらいの重りが入ってるよう。なにも考えたくない。どこにも行きたくない。めんどくさい。疲れた。だるい。なんでもいいよ。本当クソだな。わかってるけど動けない。いや、動かたくない。ああ、もう1日が終わる。そんな無関心な自分。

なにも知らない。なにも分からない。日本の政治も、世界の環境問題も、差別も、ジェンダーも、フェミニズムも、右翼も、言語も、呆れるくらいに、なにも知らない。悔しい。もどかしい。なにが必要だ。なにをしたらいい。わかりやすい方法は、知識を増やすこと。つまり勉強。本を読み、新しい言葉を覚え、客観的に物事を知る。それももちろん必要。でも、今の俺が本当にやりたいことはなんだ。答えは珊瑚舎での時間が消化してくれた。それは人に会うことだ。国、文化、政治、言葉、考え方、全部、全部違う。そんな面白い奴が世界中にたくさんいる。全員に会おう、全員と話そう。今すぐに行

こう。準備するのは一つだけ。自分が、なにも知らないこと、なにも分からないことにワクワクしていること。苦しくなったら逃げればいい。悲しくなったら、泣けばいい。時には怒ることもあるだろう。それでも「楽しい」を大切にする。そんな感情丸出しの自分。

そんな二人がいる。まるで逆。正反対の上野響生。今までの出会いで作った、今の自分。もっともっと成長するために、俺は旅をする。俺にとっての旅は、生き方だ。自問自答を繰り返し、ガジュマルの根のように、沖縄の美しい海の海流のように、流れ、曲がり、伸びていく。苦しくてしんどい時も笑えるように、楽しめるように生きていく。上野響生という旅をどう表現していこうか。

★ ★事務局便り ★ ★

★ 6月1日より登校授業が再開しました。東京で待機していた新入生もやっとみんなと顔合わせができました。昼の生徒も夜間中学の生徒も少しテンションが高めです。オンライン授業も新鮮でしたが、学校はやはり生身の人間が集う場所です。今回はそのことがはっきりと認識できたと思います。

★ ★ ★

●今年度(4月1日～5月31日)寄付・カンパを頂いた方々
 石田みどり 鹿糠文子 坂本和子 岡村健手塚賢至 照本祥敬 市野寿子 当山幸江 森口美千恵 三浦幸子 山田道子 助川寿美子 式部恵子 丹羽雅代 儀勝子 与那覇晴海 湯本貴和 上田秀一 大城喜春 北上田登久 子盛口佳子 真津昭夫 家門収一 長嶺由紀子 橋川由美子 小渡律子 幸地江美子 城間あずき 松茂良米子 名城悦子 所扶久代 石野裕子 矢崎智章 尾崎せき 松田晴代 萩原真美 城間栄 順村上 呂理伊 波雅子 仲里博彦 下地孝野 村佳雄 西山哲平 智海竹内 新野村佳雄 木名瀬武男 中川彬子 田中由香子 宮里明子 宮城邦昌 赤井朱子 冲教組 八重山支部 久保礼子 佐々木直子 志賀マサ子 泉恵子 濱崎照夫 西原邦男 星文子 渡辺明子 原田正美 三枝日出夫 友寄和子 岡部勉 花城和子 黒川優子 安田圭太郎(有) ラポータ 湯浅松生 古堅苗 荒川喜美江 大城幸太郎 高梨真知子 松永さみ 佐藤尚子 里見実松 田健次郎 新城かずさ

発行者 : 珊瑚舎スコーレ事務局 遠藤知子
 住所 : 〒900-0022 那覇市樋川 1-28-1-3F
 Tel : 098-836-9011 Fax : 098-836-9070
 Mail : sango@nirai.ne.jp
 URL : <http://www.sangosya.co>